

# 金物マガジン

プロの職人を応援する  
ツール情報誌

2017.6  
63

FREE 自由に  
お持ち下さい

天然砥石の世界へ  
ようこそ。



## 天然砥石の世界へ

ようこそ。

いま、なぜ  
天然砥石なのか

砥石の歴史は古く、地球上で人類が道具を使い始めた石器時代には、すでに天然砥石が利用されていた。日本では、仏教伝来による木造建築技術の進化に伴い、大工道具の相方として発展。鎌倉時代以降は、刀剣や包丁などの制作にも重宝され、世界屈指の刃物文化と職人の技術向上を支えた。その後、19世紀末頃に人造砥石が開発されると、天然砥石の需要は激減。現在では、市場の99%は人造砥石だ。しかし、天然砥石との研ぎ質の差は歴然。和包丁や日本刀など日本古来の刃物制作に至っては、不可欠な存在として珍重されている。たかが砥石と侮るなかれ、奥深き天然砥石の世界へ。



世界広しといえど  
天然砥石に特化した  
施設はここだけ!



### 天然砥石館

所在地：京都府亀岡市宮前町神前長野15  
森のステーションかめおか内  
電話：050-3700-1014  
営業時間：10:00~16:00  
休館日：火・水曜日(祝日の場合は開館)  
入館料：無料  
体験料：  
◆セルフ研ぎ体験…500円  
◆チャレンジ包丁研ぎ講習…2,000円/1人  
(5名以上で要予約)  
◆砥石製作DIY…1,500円~1人  
(砥石により価格は変動、5名以上で要予約)  
公式サイト：<http://taishi-kan.info/>

天然砥石の採掘風景を再現して作られた館のメインイメージとなるオブジェが、エントランスホールの中央で圧倒的な存在感を發揮



エントランスホールのイメージブースでは、日本の伝統建築を支える職人の仕事を、大工道具とともに紹介



展示室でスポットを浴びる、亀岡産天然砥石の数々。傾斜と鏡で、研磨仕上げされている裏側の模様が見られるようになっている



国内外各地から取り寄せた砥石も一堂に集結。ひと言に砥石といっても、色、サイズ、形状など実に多彩な顔ぶれ



天然砥石を使った  
砥ぎ体験は早くも好評。

バラエティに富んだ展示も見  
応え満点だが、見るだけでなく  
触れて体験できるのが大きな魅  
力。館内の体験コーナーでは常  
時3種類のプログラムが用意さ  
れており、経験のない初心者から  
プロの職人までレベルや目的に  
応じて砥石研ぎができる。料理や  
大工の職人が、自前の道具を熱  
心に試し研ぎすることも多いの  
だとか。ちなみに筆者も、自宅か  
らボロボロの包丁を持ち込み、上  
野館長の指導で研ぎを体験。仕  
上がりは、言わずもがな。

## 2017年4月に京都府亀岡市に 天然砥石文化を伝えるべく 「天然砥石館」がオープン!



ほとんど見られなくなった天然砥石。その一大産地である京都・  
亀岡に、2017年4月、世界初となる天然砥石専門の体験型  
ミュージアムが誕生。取材班が、いざ亀岡へ。

### 今回の開館に至る経緯と この施設の持つ意味とは。

世界初の体験型天然砥  
石専門ミュージアムが  
オープンしたと聞いて訪  
ねたのは、京都府亀岡市。  
2億5千万年前の合砥と  
1億5千万年前の青砥、  
2つの砥石層がある国内  
随一の天然砥石産地だ。  
「京都で天然砥石の採掘  
が始まったのは約800  
年前の鎌倉時代だといわ  
れています。日本各地の産

地から採れる天然砥石の  
中でも、京都産の合砥や  
『丹波青砥』と呼ばれる中  
砥は、上質なものとして  
知られてきました。特に、  
亀岡では最も粒子が細か  
い合砥を今でも採掘して  
います」  
そんな一大産地とはい  
え、天然砥石専門のミュー  
ジウムとは、少々マニアック  
過ぎる気もする。



館長 上野大成さん

自宅の包丁を自己流に研いで楽しむなど、若い頃から砥石に親しむ。日本  
研ぎ文化振興協会代表理事で亀岡唯一の採掘師、砥取家の土橋要造さ  
んとの出会いから天然砥石の危機的状況に直面。定年直前まで務め上げ  
た金属関連企業を早期退職後、埼玉から亀岡へ単身移住し館長に就任。

「我々、日本人は昔から、鉋  
や鑿、包丁などの切れ味を  
追求し、砥石と研ぎへのこ  
だわりは世界のどの国にも  
負けないでしょう。研ぎだ  
けでなく日本の文化文明  
を支えてきたといっても過  
言ではないのに、ずっと裏  
方の黒子的な存在だった  
砥石を、主役にして広く発  
信しよう」と

館内には、館長・上野さんが  
言うとおり主役としてス  
ポットライトを浴びた天然  
砥石が並んでいる。来場者  
は、そんな天然砥石の姿を見  
て、何を感じ、考えるだろう。  
「オープン間もない施設で  
すから、まずは一人でも多  
くの方に知ってもらいたい。  
プロの職人さんから子ども  
たちまで、実際に見て、触  
れて、体験してもらおう中  
で、天然砥石という日本古  
来の素晴らしい道具と研  
ぎの文化を身近に感じて  
ほしいと願っています」



# 無言

天然砥石掘匠  
砥取家四代目 土橋要造



天然砥石館から車で10数分。山と田畑に包まれた集落の一角に、日本でも数少ない天然砥石職人の工房がある。自宅である母屋の別棟に設けられた作業場で迎えてくれたのは、土橋要造さん、66歳。明治10年(1878)の創業から140年の歴史を重ねる天然砥石採掘業「砥取家」の四代目当主だ。家業を継いで40年、日本屈指の名産地である亀岡の地に根を張り、天然砥石を掘り続けてきた。

「昭和30年代までの最盛期には、砥石の工房が亀岡市内に100軒ほど、この近所だけでも30軒はありましたが、今残っているのはうち1軒だけになりました。昭和40年代から主流になった人造砥石に取って代われ、天然砥石はほとんど追いやられていったんです」

土橋さんが家業に入ったのは、ちょうどその頃。状況は決して良くなかったが、父で三代目の正次さんとともに代々受け継いだ天然砥石の採掘を細々ながらも続けた。しかし、時代が平成へと移り建築の材料や様式が進化すると、いよいよ天然砥石は危機的状況に追い込まれたという。

「ただでさえ人造砥石が主流の中で、鉋や鑿を使う大工仕事がほとんどなくなつて、『この時代に天然砥石なんか売れない』と卸業者から相手にされないようになり、仕事をかけ持ちして何とか食いつなぎましたけど……」

まさに、風前の灯。そんな状況に瀕しながら、土橋さんは決して天然砥石と向き合うことを辞めなかった。「先祖代々受け継いだ歴史を自分が終わ

らせてしまう申し訳なさもありましたが、このまま天然砥石の火が消えると、世界に誇る日本の研ぎ文化が途絶えてしまうという危機感の方が強かったかもしれない」

とはいえ、当時の砥石市場は99.5%が卸業者を通しての取引。卸業者から相手にされなければ、仕事にならない。そこで、土橋さんは知人の協力を得ながらホームページを立ち上げ、ネット通販による直販で再起を果たす。

「直販を始めて、刀剣の鍛冶屋さんや、和食の料理人さん、伝統建築の大工職人さんなど、天然砥石を探している人がまだまだ居ることも分かりました。また、直接お客さんと取引するということは、ただ売るだけではなく刃物や研ぎについても広く深く知識を持つておく必要があるのです、改めて勉強することも多かったです」

時代の流れとともに忘れ去られようとしていた天然砥石の危機を、熱い思いとバイタリテイで救った老舗砥石屋の四代目。今では家業だけでなく、天然砥石館の立ち上げや代表理事を務める日本研ぎ文化振興協会の活動にも積極的に参画するなど、日本が誇る天然砥石文化の伝承に心血を注ぐ。老け込むにはまだ早いと言わんばかりに。



▲亀岡市北西部、丸尾山の山中に掘られた採掘場。長年の経験をもとに地層の違いを見極め、上質な砥石層を掘り当てていく。火薬による発破もあるが、基本的には地道な手作業



▲山で掘り当てた砥石の原石は、軽トラで自宅横の工房へ運び込んで加工。大きな刃が回る切断機で、砥石のサイズに切り出してゆく。その作業は、大胆にして細心。ちなみにこの原石で重量約30kg



▶おおよそのサイズと形に切り出した砥石は、水平を保った回転盤に当てて表面を研磨。この後、手作業による仕上げの研磨を経て、天然砥石が完成する。同じものは一つもない文字通りの一点ものだ



天然砥石採掘・砥取家  
土橋要造  
京都府亀岡市東本梅町  
都内上条20  
T:0771-26-2545  
http://www.toishi.jp/